

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第 863 号 平成 27 年 1 月 15 日

## 自分は警察官になる！！

平成 26 年 1 月 21 日付北海道新聞の投書欄に、小野真誠君という中学 2 年の男子生徒の投書が掲載されています。

小野君は、将来は警察官になろうと思っており、何故そう思うに至ったかを投書の中で次のように述べています。

自分は自転車が盗まれ、盗難届を出しに行った際、警察官の方々が『私たちが責任を持って捜します』とってくれました。それから 1 カ月後、「見つかりましたよ」とわざわざ家まで来てくれたことが、きっかけになりました」

子どもにとって、普段接する大人といえば、親や教師が中心で、全く見も知らない人と話をするというのはちょっとした冒険だと思います。

恐らく小野君も、交番に自転車の盗難届を出しに行く際は、心臓もドキドキする位緊張していたのではないのでしょうか。ところが、実際に交番にいとってみると、警察官が真摯に対応してくれた上に、1 カ月後に自宅まで盗まれた自転車を届けてくれたというのですから、感激も大きかったのだと思います。

小野君に対応した警察官は特別の事をした訳ではないでしょう。むしろ、小野君に対しても少年だからと適当にあしらうのではなく、誠実に、当たり前前事を当たり前前にしただけだと思います。しかし、その警察官の言動は、一人の少年の心を揺さぶる程に影響を与える事になりました。

教育というものが人格の完成を目指して行われるものである以上、教育の担い手は、学校の教師だけに限るものではありません。保護者をはじめ地域の皆さんもその一翼を担っており、警察官もその一人である事はいうまでもありません。

教師や保護者をはじめ多くの大人達が日々どのような姿を子ども達に見せるかは、子ども達の成長に対して百万言言葉を弄するよりも遙かに大きな影響を与える事になるでしょう。

私が、教師を目指す若い方々に「子ども達は教師の背中を何時も見ている。その事を片時も忘れないように」と常に申し上げているのは、そのためでもあるのです。

教育には必ず結果が問われます。その結果は、教師の評価と繋がる事は当然です。「教育には評価は馴染まない」というのは、教師の思い込みに過ぎません。

教えた事、伝えた事が実際に子ども達にどう伝わり、子ども達がどう変化したかを把握する事は極めて重要です。

教育者の大村はま氏は、「教師としての子どもへの愛情というものは、とにかく子

どもが私の手から離れて、一本立ちになった時に、どういうふうに人間として生きていけるかという、その一人で生きていく力をたくさん身につけられさえすれば、それが幸せにしたということであると思いますし、つけさせられなかったら、子どもを愛したとはいえない（同氏著「新・教えるということ」から）」と述べていますが、教師が幾ら授業を一所懸命やったとしても、子ども達の成長に繋がらず、「生きる力」を身につけさせる事が出来なければ、その教師の教育実践は子どもにとっては生きたものになっていなかったといわざるを得ません。

小野君は、もし自分が警察官になったら「日本を豊かにしたいと思っています。一つの区、一つの市からしっかりと安全を確保しないと、日本が豊かになるのは難しいと思うのです。」と述べています。

そして最後に小野君はこういいます。

「こつこつ学んで、一つ一つの努力を無駄にしないで経験を重ね、あこがれの警察官になるために頑張らなきゃいけないと、思っています。」

一人の少年にかくいさせた警察官は、意図せざる教育の実践者といえるのではないのでしょうか。（塾頭：吉田 洋一）